
正道を進む騎士

裏鏡 美委

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正道を進む騎士

【Nコード】

N0656V

【作者名】

裏鏡 美委

【あらすじ】

イナズマジャパンがFFIで優勝してから、はや十年・・・その世界には、本物のサッカーは無く、只支配される企業的なサッカーしかなかった！！

かつての栄光を、年々と錆付かせている雷門中学では、本気でサッカーをしたいと思う分サッカー部は廃部へと追い込まれて行く！？新たな監督と、最強のストライカー。

今まで見せていなかった、最強のストライカーがやっと本気になるっ！！

イナズマイレブンGOのオリジナル夢小説！

主人公説明 見るも見ないもどつぞ^^

名前——円堂心

デフォルト——エンドウココロ

微妙に黒よりの蜂蜜色をした髪の毛を持つ。

長さは、背中の中間辺り……。普段は左側の耳の辺りで、結んでいるが、

サッカーをやる時は、耳の辺りで二つ結びになる。

前髪はぱつっんもどきで、右側で少し分けている。

目の色は黒。漆を幾重にも折り重ねた様な美しい瞳。

光加減や見る角度によっては、淡いブルーにも見える。

制服は少々アレンジしてあるが（リボンの柄のみ）、サッカー練習時の格好はラフにラフを足した様な格好で行う。

皆がユニフォームなのに対して、心だけパーカー＆短いユニフォームのスボン。

可愛い。文句無しの美少女。

だが、性格がこの上ない程に円堂似の為、天然が炸裂している。

成績優秀、スポーツ万能。

女子であるのにも関わらず、何故か女子にもモデル。（本人にも理由は不明）

一人称は私、僕。

初めてあった人を、名前で呼ぶ癖がある——上に、若干イタリアが入っている為か、

その場の状況を考えず、抱きつくという癖もある。

呼び方は自由すぎる。恐怖にかなり鈍感。（剣城を京ちゃん呼ばわり）

中々に抜けている少女だが、サッカーに関しては天才的。

ポジションは何処でもOK 何処でもプロ並の実力を発揮する。

神童拓人と霧野蘭丸の同級生&幼馴染。

難しい考えが苦手なくせに、フィフスセクターには自分の忍道（？）故に、絶対に従わない。

というか、父さん（円堂守）が従わないからだったりもする。

フィフスセクターの事は、『アレ』呼ばわりだったり。

人間関係

家族 父・円堂守

母・円堂貴鎖（旧姓、支伝貴鎖↑シデンキサ）

仲良しすぎる兄貴達。

風丸一郎太 豪炎寺修也 鬼道有人 吹雪士朗 等・・・

簡単には、イナズマキャラバン及び、幼少期の円堂達と戦い打ち解けた輩。

幼馴染

神童拓人 霧野蘭丸

可愛い弟分

松風天馬 西園真助 剣城京介

私はマネジじゃ無いよ？サッカーするほう！
皆、サッカーやろうぜっ！！by心

備考

必殺技はイナズマキャラバンの面々の技、全て。

化身

正義と大地の女神テミス

アポロンの矢

右足の踵でボールを蹴り上げ、ヒールをした後に

バイシクルの形でけり込むシュート技。

白く輝く軌跡の様に、空を切り裂いて進む。

ホーラの囁き

チームプレイではなく、一人でボールをシュートへ運ぶ為の技。

春

春風の様に、素早く優雅にディフェンスを切り抜ける技。

この時、風によって相手は後ろへ後退し、使用者はスピードが上がる。

夏

ボールを真上へ蹴り上げ、飛び上がり地面へと叩きつける様に蹴る、ディフェンスを切り抜ける技。

蹴り上げる時に足首をスナップさせ、摩擦の力で炎をあがらせる。

そのため、太陽の様に光りを放ち、ボールをカットすることが出来なくなる。

秋

ボールを誰かへパスする様にサイドへ蹴り、半円を描いてブーメランの如く戻ってくる技。

綺麗に半円で戻って来る事のないうえ、物凄いスピード。

冬

一度ボールを地面へと蹴りつけ、その後膝を使って空へと上げ踵落としをするシュート技。

蹴りつける際に凍らせる為、雹の様に降り注ぐ。

クレッシェンド

拓人との連携技。

拓人がまず縦に回転を掛ける様に蹴り、すかさず心が横に回転を掛け蹴る。

最初の時に音符に輪が、シュートの際には紅色の風が存在し、

その時には、音符が流れ星の様にボールの後を突いていき、

何かに当たった時点ではじける。

プロローグ

ピルルルル……

朝。私がまだぐっすり眠っているのにも関わらず、誰かから電話が掛かってきた。

（……出ない訳にも……イケナイか）

はあとため息を吐いてから、何度目かのコールに入る電話を取った。

ピッ

実際は出ていない音を自身で言いながら、耳に当てる

「もしもし。こちら、眠気との戦いに奮闘しております。どうぞ？」

ふわあと欠伸をし、目を擦りながら言えば、

『ああ、心か。ちょっと頼みたいこと「唯今、電話に出る事が出来ません。ピー」という発信音の後に、私への謝罪の言葉の述べなさい。ぴ」おい。「ぶー」』

悉く邪魔をした心だったが、つつこまれた為、ここまでにしておく。

「んで？頼みって何さ。しゅーじ君」

頭が起きてきたため、耳と肩で携帯を挟みながら、制服へと着替え

始める

その際に携帯が動いてしまったが、気にしない気にしない。

『ああ。そつちにシードを送る。だから、』

「仲良くやってほしい・・・と？」

勘を頼りに言えば、ああと返ってきた。

「はっはっは。しゅーじ君。意味が分かんないなー。はっはっは。

確かにしゅーじ君の事は大好きだけどさー。

アレが好きな訳じゃないんだよー？はっはっはー」

明らかに乾いた笑い声だったと思うが、笑みだって引きつっている。

しゅーじ君が何を考えているかは知らないけれど、流石にアレに協力となると・・・

『ん？心、何言ってる？俺は、仲良くといったんだ。

協力しろとは言ってないぞ？』

・・・？

「え？」

イヤイヤイヤ。何すかそれ、おい。

「仲良く・・・と？その子と、私が？」

『そうだと言っているのだが・・・』

はっはっはっは。しゅーじ君。

「死ねやお前」

『・・・心、酷いぞ』

冗談冗談と笑ってから、着替え終わったパジャマを畳んで行く。

「うん。別にいいよー。しゅーじ君の頼みだし」

『そうか・・・。心、敵ながら感謝している。』

・・・？

「え？」

『デジャブーっ』

イメージが崩れる様な事を言ったしゅーじ君を笑いながら、違っよーと言った。

「私としゅーじ君は、友達、だよ。敵なんて、そんなみつともない・・・・」

呆れた様に言えば、今度はしゅーじ君が驚いた様だった。

「確かに、しゅーじ君の望みはサッカーの支配。

十分承知してるよ。」

『なら・・・何故?』

彼の疑問に、ニヤリと口角を上げる

「親友を超える壁なんて、存在しないから。」

一息に告げると、

『ククツそうか・・・。我が友よ』

笑われた。

・・・否。微笑んだのだろう。

その様子を思い浮かべながら、私も微笑を浮かべた。

「それだけ?」

すでに、学校の用意に達していた私がそう聞けば、

『ああ。』

簡単に返されてしまった。

そつやら用件は、それだけだったらしい。

「そう。じゃ、くれぐれも風邪には気をつけてねー」

何処かの母親の様な、終わり文句を言うと

『お前もな。』

同じように返された事に、少し驚いた

・・・が。

声を出す前に切られてしまった為、仕方無く携帯電話を閉じた。

時計を見れば、起きたつばい時間から、10分程経っていた。

「ヤバっ。長電話しちゃった（苦笑）」

テヘッと舌を出してから、携帯をスカートのポケットへと落とす。

鏡の前へと移動し、乱れた髪を整えて、左耳の辺りで結んでからスカートや制服もパタパタを叩いて、皺を伸ばした。

机の上に乗っていたカバンを持ち上げたのと同時に、

「心ー？朝ごはん出来たよー」

母さんの声が聞こえた。

「今行くよーっ」

下まで届くように声を張り上げてから、階段を駆け下りた。

♪

今日のメニューは、お握りに味噌汁。

そして、私の大好きな苺。

いつもと何等変わらない光景に、私は笑みを無くさなかった。

キッチンへと視線を移す。

其処には、手を洗いながら鼻歌を歌っている自分の母、円堂貴鎖の姿。

母さんは、10年前のイナズマイレブンでマネージャー兼選手をやっていたらしく、

今でもサッカーが上手いし、手当ても上手い。

そして何より、母さんは綺麗だ。

父さんの4歳年上だが、病弱で4年間目がさめなかった母さんは、

殆ど父さん達が生まれた時と同じ頃から成長が始まったらしい。

だからか、27には見えない程若い。

それが誇りだったり・・・へへへ。

私の視線に気づいたのか、母さんが顔を上げて微笑んだ

「心」。守待たなくて良いから、食べちゃいなー」

自分とそっくりな話し方をした言葉を受け、

「はい」

私はお握りを1つ、手に取った。

そして、一口食べようと口を近づけた瞬間・・・

バンッ

「セーフっ!!」

元氣良く父さん・・・否、円堂守が入ってきた。

この人、ちゃんと23だよね・・・？

思わず疑いたくなるほど、父さんの笑顔は無邪気だった。

「父さんおはよー」

私と言えば、

「おっ！心おはよう！！制服、似合ってんじゃねーかつ！」

ニカッと笑いながら、頭を撫でられた。

それが嬉しくて、頬を緩ませながら、

「ご飯食べようよー」

朝食をお腹の中へ入れるべく、促した。

父さんはそれに気づいて、ああ！と言いながら、向かいの席に座った。

早くして・・・父さん・・・じゃないとお握りがっ！！

自分の手に握ってあるお握りを見ながら悶えていると、

「いただきまーすっ！！！」

父さんが食べ始めた。

ふう・・・これでお握りの生存は確保されたな・・・フツ。

完璧に変な思考に陥りながらも、お握りを食べ始めた。

それから数分後、あっと母さんが声を上げた。

「・・・え？どうしたの」

そう聞けば、

「心、今日サッカー部見てくるって、行ってなかったけ？」

「あ」

数秒の沈黙の後、椅子から飛び出し、ソファに置いていた鞆を取ってから

玄関へと掛けて行つた。

早々と靴を履き、扱けそうになりながらドアを開けてから、

「ごちそうさまー！！行つてきまーす！！」

又も声を張り上げた。

嵐が過ぎ去つた様な家の中には、仲良く笑いあいながら見詰め合っている二人がいた。

第一話〇同い年の先輩、後輩・

「おはよーございまーすっ!~!」

まだ日が昇ってから、そう時間の経っていない頃。

時刻は、7時。

通りにいるとすれば、シャッターを開けて店の準備をするおじちゃんおばちゃんのみ。

あ、いや、お姉さんお兄さんもいるよっ!

まあ、何故私がこんな話をしているかというと・・・

「雷門中の場所わかん・・・おはよーございまーすっ!~!」

「おはよう、心ちゃん。頑張つてね」

「はーいっ!~!・・・ねえええええ!~!」

はい。

上記に記しました通り、私、

雷門中の場所、知りません。

困りました。いや、だってさ。

父さんにも母さんにも、場所聞いてこなかった訳よ。

.....

「いや、どうし・・・おはよーございまーすっ!」

「おや、お嬢さんおはよう。頑張つてねえ」

「はいっ!・・・よおおおお!」

挨拶だけはかろうじてしながら、私は全力疾走していた。

あれだよ、走つとけばいつかはつくっ!!

そんな変とも言える考えに行き着きながら、私は動かしている足を、少し速くした。

「・・・聞いとけば、良かったなあ・・・」

もう叶う事の無い後悔を口にして、地面を蹴ろうと足に力を込めた瞬間

「おはようございまーすっ!」

「!?!?」

何っ!?

この時間に可愛い男の子の声がするだっ!?

私は、力を入れた足を振り下ろしてそれをバネにして、後ろを振り返った。

そこには、雷門中の制服を身に纏った一人の少年がつ！

あの子に聞けば、雷門中につける・・・はずっ！

「ちよっ、その少年ストッププリーズ!!」

出来るだけの声を張り上げ、彼の背中を追う様にして走る。

彼は全く気づいてないらしく、止まる気配は無い。

え、ちよっ。

さっきまで全力疾走してた人に、この仕打ちは無いと思うな

へらりと笑って、もう一度声を張り上げる為に、大きく息を吸った

「スー・・・」

少年!!ストッププリーズだよ!!

か弱い少女が困ってるの!!止まらないと、ファイアトルネードかますぞ、コラァ!!」

やっやばい・・・息が・・・

涙で霞む視界。

ああ、なんて可哀そうな私っ！！

何とも痛い思考に陥りながらも、走る足は止めない。

幸いにも彼は、ファイアトルネードに反応して後ろを向いてくれた。

ありがと、しゅーや。又今度、ケーキでも奢ってやるよ。

不敵に笑みを浮かべながら、

「え・・・？」

不思議そうに振り向いた彼に向いながら叫んだ。

「疾風ダッシュっ！」

「！？」

一瞬後には、彼の顔はごく間近。

驚きに目を見開いている少年の前で、私は両手を膝へと置いて、息を一生懸命に吸い込んだ。

肺に入っているはずの空気を感じられない程に、酸欠になっていた私は、

息を吸うのよりも、少年の声を掛ける方を、優先させる事にした。

栗色の（推測だが）髪をした、その少年は間違いなく雷門中らしい。

私の勢いに押されたのか、半歩下がった彼の袖を掴んだ。

「ゼエ・・・ハア・・・やっと、捕まえたぞ・・・ゼエ・・・ハア・・・」

少年っ！！」

走りすぎたのか、息がヤバいほど乱れてしまったが、この際気にしない。

そんな私に、

「えっと・・・大丈夫ですか？」

「ゼエ・・・ハア・・・」

うん。ごめんね、少年。

聞いてくれた事も、背中を擦ってくれてる事も、十分に嬉しいよ。

ただね、私今息整えるのに必死で、感謝の言葉が述べられない訳ね。

円堂心、一生の俯角っ

頭の中でヤンチャカやってた私だけけど、

少年が背中を擦ってくれてた事でか、5分程で静まった息の乱れ。

世の中捨てたモンじゃないね。

「ふう……。何か止めちゃったのに、ありがとねっ少年！」

そう言って、私が笑えば

「いや、別に！困ってたらしいし、苦しそうだったから……」

彼も笑い返してくれる。

笑う角にも福来る……。ってね？

リュウジ紛いな事を考えながら、彼の顔を見つめた。

「さて、本題に入ろう」

「え？……あ、うん」

不思議そうに首を傾げた少年に、意味深に言葉を続けた。

「えつとね」

「うん……？」

流石に「迷子になったの、テヘ」とは、言い難い。

視線を泳がせながら、モゴモゴと言葉を発している私に、少年は苦笑を浮かべた

「もしかして……。迷子？」

「ドキッ」

図星を言われ、私はあろうこと自分で効果音をっ！！

幸いにも彼は、私の事を可笑しなヤツだとは思っていないらしく、アハハと笑っていた。

まあ、バレて（当てられて）しまったのはしょうがない。

「うん。私、訳あつて此処いなかの事わかんなくて・・・」

困った様に頭を掻いて、眉を下げた心に

「（あ・・・可愛い）」

彼は微笑を見せた。

つと、彼は思い出した様に、あ、と声を上げた。

「俺、サッカー部の見学しに行くんだった！」

「おおっ！私も見に行くんだった！」

彼の言葉に便乗する様にして叫んだ彼女に、微笑みながら

「そっか！じゃあ、学校一緒に行くついでに、一緒にサッカー部見に行こうか！」

突発的な案を出してみる。

心はそれを聞いて、嬉しそうに笑いながら

「うん！私、円堂心。よろしくね」

手を差し出した。

俺は、その白くて小さな手を握り返しながら、

「俺は松風天馬！こっちこそよろしくね！えっと・・・」

「心で良いよ、天馬」

「っ！？うん！よろしく、心！」

行き成りの名前呼び。

・・・いや。

男子は名前で呼ぶ事もあるだろうけど、女子はそうそう無いんじゃない？

迷ってなかったし。

自分の知っている女子っぽくは無かったけど、嫌な感じはまったくなかった。

そっいえば・・・

「心ってさ、1年生？」

ようやく進み始めた足を動かしながら、少し気になっていた事を聞

いた。

見た感じは、自分と差して変わらない様子。

ただ、少し小さい・・・かな。

少なくとも、俺の知ってる女子よりは。

そんな思考を巡らせながら、彼女の横顔を見やった。

彼女は一瞬、キョトンとした後、俺の方に顔を向けて

「2年生だよ。今日から編入するの。」

「え・・・？先輩iiiiiiii!？」

「ちよつ、天馬どうしたっ!!」

急に天馬が叫ぶモンだから、驚いた・・・

私が声を上げれば、

「せつ、先輩なら、名前で呼んじゃ・・・っ!しかも呼び捨て・・・

」

ああ、そついう事か。

慌てる彼に微笑しながら、少し高い彼の頬にキスをした。

カチーン

うん。今の彼を表すなら、この表現が一番適しているであろう。

「あれ？天馬さん、どうした？呼び捨てでもいいよー？」

何が原因が分からなかった為、さっき彼の言っていた事に対して応えた。

・・・が。

「キ、キキキ、キス・・・」

「あれ？そっち？」

どうやら自分の予測は、違っていたらしい。

「だいじょーぶだよ。私が去年までいた所なんて、そんなの日常茶飯事だったんだから」

かるーく言えば、

「それもどうかと思うけど・・・？」

苦笑した天馬の顔があった。

「そうかなあ？もう私の周りでは、色んな人がチュツチュやってたけど・・・」

「ええっ！？／／／」

顔を紅潮させ、驚愕の表情をした彼に、私はクククつと笑いを零した。

・ ・ ・

流石生粋の日本人。アソコとは、全く反応が違う。

「私の住んでたところね、イタリアなんだよ」

「へ．．．？」

赤かった顔は一気に色が抜けて、大きく目が開かれた。

その数秒後に、

「イタリアあああ！？」

「あれ、何かデジャブ？」

つくづく、この子の表情の変化は面白いと思う。

まるで、百面相の様に。

今だに狼狽しながら、驚いている彼に、「目が落ちるぞー」、とだけ忠告してから、

彼の手を引いた。

スカートのポケットから出したケータイで時刻を確認すれば、7時近く。

あれ？もしかして私、有り得ないほど早くに家を出ちゃった訳．．．

？

無駄な事をした、と頭を抱えるが、

今だに後ろで目を白黒させている彼を見て、まあ良いかと思う。

「さあさあ天馬くん！！雷門中の門を叩こうじゃないか！」

「・・・はあ。分かったよ。行こう、心」

最早天馬は、私の扱いに馴れたらしい。

あらやだ。最近の子って、飲み込みが恐ろしく早いよね。

先程までの可愛らしい少年の姿が、名残惜しくなったが、

私の前で手を引く彼の姿を見て、これもいいかもなあゝっとか思った。

よく言うじゃん？住めば都！！

知らなくたって、少し気まずくたって、馴れれば怖いモン無し！！

「心、あんまりニヤけてると、白い目で見られるよ？」

「分かっているながら一緒に居てくれる、天馬が大好きだあっ！！」

「うわあっ」

後ろから抱き着けば、前のめりになる天馬。

ムムっ、鍛え方が足りん!!・・・じゃなくて、

「天馬！私が重くても、そこは踏ん張る処でしょう！」

「無理言わないでよ・・・後、軽いよ、かなり」

行き成り抱きつくからでしょ？と、大人な対応をされてしまったが、関係ない。

何か小さく言っていた、それでも離そうとはいない彼に、わたしは嬉しくなった

「ありがとねっ天馬」

「え？」

素直な言葉に驚いた声を上げるが、

「あっ！雷門中見えたよ！」

キヤツキヤと騒ぐ彼女を見て、天馬は薄く笑った。

「（こんな先輩も、可愛いから、良いか）」

少し抜けてて、それでいて何処か決れない神秘的な彼女の存在に、

ただただ、俺は嬉しかった。

○奇跡的な出会い●

彼女と彼が、過去にあったことがあり、

イナズマイレブン関連で、深い関わりがあったことを知るのは、

まだ先の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0656v/>

正道を進む騎士

2011年11月13日00時52分発行